

## カントヴィック研究の過去と現在 (上)

—ドーントによる問題の整理と継承—

山 田 雅 彦

### はじめに

7世紀から9世紀、中世初期の北海およびバルト海沿岸地域には、「エンポリウム」emporium, 「ヴィック」wik (vic), あるいは「ポルトウス」portus の語で表記される、恒常的な定住地というよりはむしろ一時的な交易地, あるいは商業宿营地と考えられる特殊な集落が多数存在したことが知られる<sup>1)</sup>。我が国では一般に「交易地」の名で呼ばれるこれらの集落は、形態面でも機能面でも未だ知られざる面が多く、なかにはその正確な位置さえ不明なものがある。ここで取り上げるカントヴィック Quentovic はその一つで、フランス北部アルトワ地方の南東から北西に流れるカンシュ川 la Canche の河口付近に存在し、北方との交易で大いに栄えたことは古くから周知のことであったが、その正確な場所, あるいは生成から消滅にいたる正確なクロノロジーは完全に明らかにされたい。

もっとも、カントヴィックに言及する文献史料はすでに19世紀の前半にはほぼすべてが知られていたとみてよい。多くの古記録は、『ドイツ歴史記念物集成』MGH (Monumenta Germaniae Historica) など、当時の大規模な史料刊本化作業を経て、公の目にとまるようになっていたと考えられるからである。錢貨史料や考古学史料を除き、文献史料に限って整理すると10世紀初めまでで20点余りを現状で確認することができる(付録資料1-2を参照。年代順に整理している)。決して豊富過ぎる量ではないが、手のつけようもないというほど少量ではない。記述内容もある程度具体的なものが多いが、最大の問題はその位置を特定するだけの材料がなかったということである。文献史料は、大きく2種類に分類される。第一のグループは、聖人伝や年代記におけるカントヴィックをめぐる記述で、こちらはカントヴィックである聖人の奇蹟が起きたといったように、その言及は偶然的なケースがほとんどである。第二群が、国王文書を中心とする証書・勅令類で、カントヴィックへの言及が意図的である。例えば税の徴収やその免除、当地での財産保持に関する言及がそれである。

これらを相互に比較検討する事で、これまで多くの論者が自分なりのカントヴィック史を書いてきた。その際独自の色合いを出すのに貢献したのは、例えば考古学的知見であり、ま

1) 中世初期の交易地に関しては、巻末の付録資料2 [文献目録 (刊行年順)] にあげた諸研究が詳しいが、さしあたり、我が国では A. Verhulst, *The Rise of Cities in North-West Europe*, Cambridge, 1999 (アドリアン・フルヒュルスト著、森本芳樹・森貴子・藤本太美子訳『中世都市の形成—北西ヨーロッパ—』岩波書店, 2001年) を参照。

た周辺地域の情報やヨーロッパ各地における類似現象に関する情報である。いわば既存の資料枠——直接カントヴィックに言及する史料群——を超えて、どれだけ他の歴史的素材と整合的に組み合わせて論じることができるか、それによって、カントヴィックの歴史は塗り替えられてきたといっても良いだろう。それは、19世紀半ばにカンシュ川河口部右岸に位置するエタープル Etaples 市の郊外で、ガロ・ロマン期からメロヴィング時代にかけての一大定住域が発掘され、それをカントヴィックと同定した歴史研究者のみならず、20世紀後半にこの見解を否定した論者、さらには70～90年代にこれを継承・発展させて、2010年に新しい諸成果の総合を目指す一書を刊行したグループ（Lebecq, Béthouart, et Verslype, (dir.) 2010)<sup>2)</sup>まで事情は同じである。

カントヴィックをめぐる諸研究はこの半世紀間に大きく前進した。先ほど挙げたばかりの2010年に刊行された総合的研究集会報告集は、この間の研究の進展と今後の課題を明示する金字塔である。本研究ノートは、この論集の公刊を一つの契機として着想したものである。カントヴィックはそもそもどこに位置するのか、なぜ長い間研究は進展しなかったのか、そしてカントヴィックを取り上げること自体、中世初期、あるいは中世初期から中期にかけての地域史にとってどのような意味を持つのか、こうした問題群を考察してみたいと考えたのである。

## 1 エタープルに比定されつつあった時代のカントヴィック研究

カントヴィックは、7世紀はメロヴィング朝下の貨幣の一つにその名が刻まれることで史料に初出する交易地だが、史料に現れ始めた7世紀後半から9世紀前半のカロリング朝全盛期にかけて大いに栄えた後、9世紀末以降突然史料の世界から姿をくらます。つまりはほぼ250年の間フランク王国北辺部の国際交易地として大いに栄えたものの、カロリング後期以降の当該流域におけるどの都市とも直接のつながりが無いと考えられる集落なのである。当然、中世中期、12～13世紀の頃にはその存在は謎めいたものとなり、やがて人々の記憶からも消えていったように思われる。

ところが、1840年代、カンシュ河口右岸に位置するエタープル市の近傍で、ローマ帝政後期から中世初期の頃と見られる定住跡が発掘された（Comité de Boulogne 1841-43）。この定住跡をして、中世から近世にかけてその位置を特定できなくなっていたカントヴィックと同定されることとなったのは、地元の歴史研究誌に掲載されたロベールの小論（Robert 1851）と、1840年の調査に加わり考古学的検証を重ねたクザンの二つの叙述（Cousin 1851; Id. 1864）による。

エタープル出身の碩学の一人スーケ（Souquet 1863）は、クザンらの見解をベースにして、

2) カントヴィック関係の文献の表示はこのように本文中に含めて簡便に行い、以下も同様とするが、レフェランス詳細については巻末の文献目録（付録資料2）を参照のこと。

カントヴィックからエタープルへの都市の継承論を唱えている。彼によれば、カントヴィックの歴史的記録の最後の年が882年であり、エタープルの史料初出が900年であるという年代関係がこの一帯の歴史的変遷を端的に物語っているという（この史料年代提示は現在では支持されないが）。スーケのこの著作を一定評価した書評（Dumont 1864）による限り、傾向としては、カントヴィックを右岸の河口部に想定する論者の多くが地元の研究者、特にエタープル市関係者に多い。これに対して、カントヴィックをカンシュ左岸で、エタープルよりもいくらか遡った地点に同定しようとしている論者も一定数存在し、おもしろいことに彼らの多数は同地域と直接の縁のない研究者である。例えば、19世紀前半には編纂が始まっていたMGHのテキスト校訂者は、関連史料の編纂に関わって、カントヴィックをカンシュの左岸と同定している<sup>3)</sup>。とはいえ、スーケの作品が地元の地域史をベースに最新の考古学的成果も含めて論じたという事情が、こうした綱引きの中で、全体的にカンシュ右岸＝エタープル（もしくはその近郊）所在説を優位なものとしていた。

この後、19世紀の第3三分期以降、カントヴィックの位置に関する議論は止む<sup>4)</sup>。実際には、ほとんどの研究者が史料における一定の矛盾を感じつつも、エタープル説を仮の結論としたまま、正確な立地問題を避けるようにしていたといった方が良いかもしれない。立地問題よりはむしろ、20世紀に入ると、カントヴィック史はより広い脈絡で論じられて、西欧中世初期の国際的な商業関係史の一コマとして言及される傾向がますます強くなっていた。1907年にドイツ人学者のフェングラー（Fengler 1907）がメロヴィング時代からカロリング時代の西欧流通史を書く中で、カントヴィックはすでに7世紀から繁栄する北西欧随一の港湾都市としてヨーロッパ史学界に広く知られるようになった<sup>5)</sup>。ちなみに彼は、カントヴィックの位置をエタープルではなく、むしろその対岸あたりに想定したが、その点はあくまで仮定的な見解であった。その後、中世初期西欧経済を悲観的に捉えるアンリ・ピレンヌ<sup>6)</sup>を批判して、同じベルギーの歴史家ヴェルコートラン（Vercauteren 1934）が、中世初期西欧世界における都市的集落の継起的展開を跡づけようと関連史料を網羅的に整理し、なかでもカントヴィックを8世紀から9世紀の英仏海峡から北海地域における重要な国際交易拠点として描き出すことに成功した。ヴェルコートランによると、メロヴィング時代の7世紀初めに〈VVic in Pontio〉の名を刻む銀貨が現れることから、歴史的事実としてのカントヴィック史が始まるという。フランク王国北部のポンティウ地方に位置するとある町＝ヴィックが造

3) MGH, SS., t. 3, p. 35.

4) 研究のしばらくの間の停滞については、後述するエリオの論文でも指摘される（Héliot 1937, pp. 260-261）。

5) フェングラーが7世紀前半からの繁栄の証拠とした史料（サン＝ドニ修道院宛の国王ダゴベールの文書で彼は629年のものと判断）は、この後カロリング時代9世紀前半の偽文書であることが判明しており、7世紀からという見方は、レヴィヤンにより批判され修正されることとなる。L. Levillain, Etudes sur l'abbaye de Saint-Denis à l'époque mérovingienne, IV, *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes*, t. 91, 1930, p. 14-16.

6) アンリ・ピレンヌ『中世都市』創文社、1970年。

幣地の一つとして機能していた事実から始まり、その後、メロヴィング時代の7世紀半ばからカロリング時代の9世紀半ばにかけてカントヴィックという地名が文献史料に直接現れ、その地名を付した銭貨の製造が続く。こうして、そこがフランク王国の北方世界、バルト海、あるいはイングランド向けの一大交易地として機能していたと結論することは、中世初期社会経済史のほぼ規定の路線となったように思われる。

北フランスの出身ながら、本来は西洋各地の建築史を専門としたピエール・エリオが『北フランス史誌』*Revue du Nord*にカントヴィックに関する短い論文を寄稿したのも、このヴェルコートランの著作に影響されたものであり、彼はフェングラーやヴェルコートランによって示された商業史的な意義に関する考察を「最近の成果」として高く評価した。その一方で、正確な位置問題については、エタープル説に流れる傾向が強いことを認めつつも、当時においては4つの可能性が相互に対峙し合っていると述べるにとどめている（Héliot 1937, p. 263）。

その後も、国際的な交易史研究で成果が続いた。グリアーソンやサップが1940～50年代の代表で、彼らはより広範な史料を用いて、フランク王国とアングロ＝サクソン期イングランドの商業関係を描こうとした。ちなみに両者ともカントヴィックをエタープルではなく、カンシュ南岸＝左岸のいずれかの地点に求めようとしていたのは疑いない（Grierson 1941, Sabbe 1950）。それは、そのような見方をする方が、フランク王国中心部との関係も説明しやすく、イングランドから大陸へのアクセスも無理がないと判断したからと推察される。

他方、20世紀前半はカントヴィックをめぐるこのようなアカデミズムの進展を見ただけではなかった。それとは別に、エタープル市とその近郊地域は20世紀前半にパリからの海水浴場、保養地として大いに発展していた。鉄道の発達とともにエタープルが都市的に発展し、エタープル対岸の地トゥケ Touquet がパリからの海水浴客で賑わい、1912年にはトゥケ市は「パリ海水浴場」を意味する「パリ＝プラージュParis-Plage（当時は単数形、2005年以降は-Plagesと複数形に変更）」の名を付するようになった（自治体名「トッケ＝パリ＝プラージュ」の誕生）。このことは、アカデミズムの世界はともかくとして、一般大衆の間には、ツーリズムのブームの中、カントヴィックという未知の中世都市に対する憧れと伝説をもたらしていったように思われる。また、このような風潮はエタープル市行政当局をして、カントヴィックの後継者たることを自負するよう促していった可能性は十分に考えられることである。この点については第三節の冒頭で再び触れることになる。

## 2 ドントによる問題の整理 ―参照枠の提示―

第二次大戦後、ピレンヌ批判を一つの契機として、ベルギー学界を中心に中世初期都市史研究が急速に進む中で、カントヴィックの位置同定問題にベルギーの歴史家ヤン・ドント氏が果敢に挑戦してきた。その論文「カントヴィックの問題」（Dhondt 1962）は、錯綜し

42 (095)

た問題点を整序し、正しい方向性を示したという点で、まさしく画期となる作品である。ドントの議論は四点にまとめられる。

第一に、位置同定に関する決定的見直しはこの論文によって方向付けられたといっても過言ではない。まず、エタープル説の重要な史料根拠とされた Villa Stapula という地名表記は9世紀後半以降の史料で言及されるだけ（付録資料1-2-16）で、カントヴィックの荒廃時代に一時的に代用されたとも考えられることから、カントヴィック＝エタープル説は簡単に片付けられる（Dhondt 1962, pp. 188-190）。また、カントヴィックがあたかもカンシュ川の右岸＝北側に位置すると見える史料が他にもあるが、これも注意深く読めば問題はないとする。例えば、付録資料1-2-10の王国分割例の記載も、一見するとカントヴィックはポンティウとは別になり、カンシュ以北の地方群とセットにされているが、カントヴィックのみが地方名ではなく、特定の集落の名称であることから、特別な例外措置として本来のポンティウから切り離されて相続に当てられたとドントは読む（Ibid., p. 194）。文言からしても説得力は十分ある。その一方で、カントヴィックは「サン＝ジョス Saint-Josse 修道院の傍ら apud」に位置したこと（付録1-2-11）を無視してはならないという。サン＝ジョスとは、カンシュ川に直接面してはいないが、比較的近い高台にあって、しかもカンシュ左岸＝南岸に位置するメロヴィング時代創建の古刹である。加えてドントは地名学の成果を縦横に駆使し、Vic から Vis,あるいは Wis への音の変化が中世に生じたとして、同じくカンシュ左岸に現存するヴィズマレ Visemarest という地名にスポットを当てる（Ibid., p. 195）。地名の意味をあえて訳すならば、「沼のヴィック」「ヴィックの沼地」となろうか。いわば、「沼地となったカントヴィック」と解釈することが可能ということだ。この地を一つの候補とする見方はむろん以前からもあったが、ドントが所属する当時のベルギーのヘント大学が地名学の最先端であったこと<sup>7)</sup>が、この見解を大いに後押しすることとなった。

ドントの第二の貢献は、テキスト群の比較分析に基づく、成長プロセス自体の大幅な書き直しである。かつてフランス中世史学の重鎮ロットは、400年頃のものと思われる Magister Militum Praesentalis II の盾に描かれた後期ローマ帝国軍司令官の名簿、『ノティティア・ディグニタートウム Notitia dignitatum』にある〈in loco Quartensi sive Hornensi〉の文言に注目した。そして、〈Quartensi〉を〈Quantensi〉の綴り間違いであるとして、帝政後期からのカントヴィック成長を論じようとした（Lot 1915, p. 5）。しかしこれはドントによるまでもなく、今では完全に否定された見解である（Dhondt 1962, p. 196）。

実際にカントヴィックに関係する情報が出てくるのは、7世紀初め以降であり、それも文献情報よりは〈VVic in Pontio〉銘を刻んだ錢貨の情報による。その後7世紀後半になると文献情報が加わってくるが、ドントがここで注意を促すのは、それら最初の言及のほぼす

7) 例えば、M. Gysseling, *Toponymische woordenboek van Belgie, Nederland, Luxemburg, Noord-Frankrijk en West-Duitsland*, Gent/Brussel, 1960, 2 vols. この地名事典の第2巻でカントヴィックを示す史料文言の数種類が列挙されている。Ibid., t. 2, pp. 815-816.



べてが、アングロ＝サクソン系の記録群での言及であった点である。きわめて重要な指摘で、カントヴィックという地名は大陸側からではなく、むしろイングランド側で先に定着していたという主張である。やがて、カロリング時代に入って8世紀後半より、カロリング朝の国王文書や年代記等の私的記録でもこの地名が普通に用いられるという（Ibid., pp. 197-204）。大陸での「カントヴィック」呼称の定着もいわば逆輸入として起きたものとするこの解釈自体は、その後の文献史学や地名学によっても支持されることとなる。

全体として、これらの史料を通して確認すべきなのは、メロヴィング時代に当地はイングランド人にとって対大陸貿易の拠点の一つという側面が強かったが、カロリング時代になると、そこは北方、イングランド向けのフランク王権の国際管理交易の拠点、そして課税拠点として機能したというプロセスである。ドントは、カロリング時代の教会と修道院の経済活動に積極的な意義を与える。北フランスの有力修道院がカントヴィックやライン河下流部のドレストット Dorestad——カントヴィックと同じく当時の代表的な国際交易地<sup>8)</sup>——などで流通税免除特権を得て、北方交易に深く関わっていたというのである（Ibid., pp. 202-205）。北フランスの諸々の有力修道院はそこでの流通税を免除されることで、北方交易の活性化に貢献したとするこの指摘は、往時のカントヴィック経済の性格を見極める上で重要な貢献となったし、ライン下流部のドレストットと組み合わせての本格的な議論も、彼によって開始されたといつて良い。

それでは、カントヴィックとはどのような集落であったか。ドントはこれまで誰もが総合的には試みなかった同地の9世紀前半頃の集落状況をまとめ直している。それによると、どの史料からも集落内の教会に関する言及はないが、少し離れた周辺地域に3つの教会があって、それらが集落教会の機能を代替したのではと推察する。また、サン＝ベルタンなど、北フランスの有力修道院が近隣に地所（マンス）を与えられていた事実から、そこに農地もしくは修道院が使用する商業用地があったと見る。さらにいくつかの情報（特に、付録資料1-2-3, 19, 20など）が示唆するように、防備施設の存在も想定される。後代、938年になって西フランク王ルイ4世が当地を「再建」する命令を出している（付録資料1-2-23）のも、この脈絡で読むと辻褄が合うというわけである。また、改めてサップの成果（Sabbe 1950）を援用しつつ、当地とイングランドとの深い関係を再確認し、国際的交易地に必要でふさわしい救護・宿泊・迎賓機能の提供には、近隣のサン＝ジョス修道院がその任に当たったとする。ここから描き出されるカントヴィック像は、市内教会の存在は欠くとしても、それなりの防御集落であり、しかも郊外の修道院施設がこれと連動していたこととなる。ドントらしいカロリング都市像の積極的な主張の一例と言えるかもしれない（Dhondt 1962, pp. 204-207）<sup>9)</sup>。

8) ドレストットに関しては、さしあたり拙稿「カロリング朝フランク帝国の市場と流通—統一王国の時代を中心に—」拙編『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史』清文堂、2010年、22-24頁参照。またかつての研究状況は、今来陸郎「西洋中世都市起源論—ドレストットの研究—」『関西学院史学』18号、1977年3月、1-28頁。

9) ドントの独特の都市論の特徴については、拙著『中世フランドル都市の生成—在地社会と

第三に、ドントはカントヴィックの衰退あるいは消滅の時期に関しても、これまでは異なる見通しを提示して見せた。まず、ドントに寄りつつカントヴィックの終演に関する歴史情報を整理すると、842年に襲来したノルマン人によって何らかの破壊・略奪行為があったことは確かである。そして、864年のピトレ勅令がこの地を依然としてカロリング朝認定の造幣地に定めているが、これが明示的な文献情報としては最後のものという。もっとも、これ以外でも9世紀後半に執筆された『聖ヴァンドリーユ伝』でも地名の言及があり、さらに他地域の史料や古銭学情報を加えると、9世紀後半から10世紀初頭までは一定の繁栄が維持されたとドントは考えている（付録資料1では2-18, 19, 20, 21など）。これは、9世紀後半にはカントヴィックの命運が潰えていたと見なした19世紀のクザンやスーケ解釈とは一線を画している。それでもこの頃に漸次的にこの集落の都市機能が衰退したことまでは否定されない（Ibid., pp. 214-222）。

では、その背景は何か。この点でドントが最も重視するのは、海面の変化とノルマン人侵攻の激化である（Ibid., pp. 222-223）。実はこの見方こそが、カントヴィックの後継都市として上流のモントルイユ Montreuil が注目されることにもつながっていくのである（Ibid., pp. 223-224）。これまでは河口に近いエタープルとの継承関係に触れる研究こそあったものの、モントルイユとの関係性に言及するそれはほとんど皆無であった。カンシュ中流のモントルイユの起源に関しては、戦後まもなくロット、レストコワの論稿により、詳細が次第に明らかとなっていたが（Lot 1945, Lestocquoy 1948）、ドントがカントヴィックの経済機能の後継役をエタープルよりもむしろ、上流の城砦都市モントルイユと見なした背景には、これもヘント大学で当時研究が進んでいた9世紀の「海進」transgression maritime の研究成果が大きく関連している<sup>10)</sup>。それらの研究によると、北海とその周辺海域では9世紀半ば、海面が何らかの理由によって一時的に上昇し、もともと海面との高低差が小さい低地諸地方の沿岸一帯が沈水し、河川流域部でもその内奥まで海水の逆流とその部分的な滞留現象が見られたという。これによって既存の交易地は沈水するか、激流にのまれるかして壊滅するが、上流部にその代替港湾地が生まれてくる、という見通しも立ってくる。ドントが考えたのはこの論法であり、ドントはロットの研究成果を吸収しながら、あわせてカンシュ左岸での都市的機能の連続性を主張している点でもきわめて用意周到である。モントルイユは中世中期以降、モントルイユ＝シュル＝メール Montreuil-sur-Mer（海に面するモントルイユ）の名で呼ばれるのは、この点で確かに意味深長である。

第四の論点として、ドントは、カントヴィックの興亡史を当時の国際的な政治・経済状

商品流通一』ミネルヴァ書房、2001年、22-26、61-69頁を見よ。

10) 1950～70年代に進められた海進に関する歴史地理学的なまとまった研究成果は、ドントの当時若き同僚フルヒュルス（フェルフルスト）によって進められていた。A. Verhulst, *Historische geografie van de Vlaamse kustvlakte tot omstreeks 1200, Bijdragen voor de geschiedenis der Nederlanden*, dl. 14, 1957, pp. 1-37; Id., *L'évolution géographique de la plaine maritime flamande au moyen âge, Revue de l'Université de Bruxelles*, t. 15, 1962/23, pp. 90-106.

況に置いて考察することを忘れなかった。もともとカントヴィックは大陸側からではなく北方の人々から注目された。これは7世紀以降、北方のスカンディナヴィア人勢力の南下が起きて、新商業路が形成されたからという。これがフリーセン人、アングロ＝サクソン人を刺激し、彼らの対フランク交易活動を活発化したことで、カントヴィックやドレストットは、北方・イングランドの世界がフランク王国内陸部を介して南とつながる交易網の拠点となり、これをやがてフランク王権が管理し、支配するようになったとされる。しかし、ノルマン人による攻撃とフランク王国の北辺における防御機能の低下が生じたことで、従来の拠点機能は縮小するのだが、彼がこの内在プロセス以上に重視するのが、ノルマン人のロシア・ノヴゴロド経由での東方ルートの開拓とそれに伴う北海・フランク王国経由での南下ルートの意義の低下であった（Ibid., pp. 225-226, 228-242）。この点でドントは改めて、ヴィック、エンポリウム系集落の「都市基盤」の脆弱さを述べる。ただし、カロリング時代など中世前半における領主制的都市論を堅固に展開するドントであるからこそ、地域の潜在力は消失しないとして、しかるべき代替地点に都市拠点が移動していくというのである（Ibid., pp. 225, 242-245）。

### 3 ドント後、1970年代におけるカントヴィック研究の活性化

ドントの研究によって、カントヴィックの「争奪戦」が「地元」で白熱したことは確かである。1964年以降エタープル市は、近傍の発掘調査を再び始めて、ガロ＝ローマ期の定住跡を見つける（Giard 1965）。そして同市は、1967年に市中心部の18世紀の建物を利用して「カントヴィック博物館」を開設した（2014年10月現在も同地にその名で存在する）。さらに、1970年にはエタープル西部のサブラン Sablins 地区で中世初期の技術者集落の存在が確認されたこと<sup>11)</sup>も、護教적エタープル論者をしばらく長らえさせる結果につながった。ドントの学術的姿勢と伝統的な地元への愛着は、当然のことながら最初はかみあわなかったのである。当時はまだカンシュ川流域やエタープル市周辺には大学などの高等教育機関は存在しなかっただけに、地元の歴史愛好家や考古学協会がドントの高度に「冷静な」見解に、同じく「冷静に」対応できたようには思われない。

とはいえ、ドントによって整理されたテキストとその行間に関わる情報群は、北フランスやイギリスの多くの歴史学者、地名学者、考古学者、古銭学者の思考を刺激して、70～90年代に多くの調査報告と研究成果を生み出すこととなった。何よりも、カントヴィック問題を狭い「位置同定問題」だけでなく、いよいよ本格的に中世初期の都市機能の在り方とその継承の問題へと昇華させた意義こそきわめて大きい。この論点はその後重要な論点として発展的に受け継がれ、2010年の研究論集では例えばカントヴィックとモントルイユの関係がよ

---

11) Lebecq, Béthouart et Verslype 2010からの情報。



り総合的な観点から検証され直していくこととなる。

他方で、ノルマン人の活動の意義についての彼の議論は今ではかなり色あせて見えるが、それでも中世初期の交易地と交易網に関わる全ヨーロッパ規模での研究をその後活性化させる契機の一つとなったことは確かである。後述されるように、1970年代以降ドイツ、ベルギー、イギリス学界を中心に、この方向での研究は非常に活発化する。80年代には盛んにこの面での国際研究集会が開催されていく。北海沿岸部のみならずヨーロッパ全域に関わる他の国際交易地との比較研究、あるいは中世初期の国際的商業ネットワーク議論が活発化したことの重要な副産物として、オランダでは、ドレストットの組織的発掘調査を国をあげて取り組むようになった。これによって、ドレストット研究もファン＝エス氏に率いられながら1960年代よりその精度を大きく上げ、以後多くの現地発掘調査報告と研究論文を生み出していくこととなる<sup>12)</sup>。

話をカントヴィックに戻すと、カンシュ流域でも1970年代初頭に入って大きな動きが見られた。何よりも、新しい自動車道の建設が着手された結果、これまで候補地とされながらも考古学調査が一度も行われてこなかった関係地域での発掘調査が可能となったことの意義は大きい。1974年3月、地域全体で組織された考古学調査団によるエタープルではない「候補地」を求めての現地調査がついに始まる。エタープルより上流部分のカンシュ川沿いの数カ所として、特にヴィエイユ＝エダン Vieil-Hedin、ベルク Berck、ヴィズマレ Visemarest（現在の自治体としては、ラ＝カロットリー la Calotterie 内）の三カ所が注目されていたが、その後の調査により、1975～76年の夏、特にヴィズマレの地点からカロリング期からポスト・カロリング期の陶器片等が発掘されるにおよび、事態は急展開を見せ始める。これはヴィズマレで発見された最初の考古遺跡である。この成果は、1977年に『北フランス史誌』上でカントヴィック研究の小特集が組まれた際に公にされている（Cousin et Leman 1977）。

1977年の『北フランス史誌』のでカントヴィック研究の小特集は、この考古学的報告を元にして、リール大学のスタッフを中心に、文献史学と言語・地名学の分野からも貴重な研究報告が行われた。それらは、先に見たドント説を補強するだけでなく、今日につながる新しい論点の提示も行っている。

考古学調査の結果も考慮に入れて、文献史学の立場から新たな視点を加えたのがリール大学のミッシェル・ルーシュである（Rouche 1977）。彼によると、6世紀からの英仏海峡における交易の活性は、ゲルマン系住民、特にアングロ＝サクソン系住民による交易圏の形成としてまず理解される。これはブリタニアにおけるキリスト教化の進展過程とも連動してい

12) 1960年代以降のドレストット研究の経緯と現在の到達点として、さらに研究の現状に関しては、Willemssen, A. and Kik, H., *Dorestad in an International Framework; New Research on Centres of Trade and Coinage in Carolingian Times; Proceedings, Dorestad of First 'Dorestad Congress' held at the National Museum of Antiquities Leiden, the Netherlands June 24-27, 2009*, Turnhout, 2010. 同じく同書を紹介した拙稿（『西洋中世学』3号、2011年、213-214頁）もあわせて参照。

たもので、6～8世紀には「サクソンのな」両沿岸地域が生成されていたという（図1参照）。

また、歴史地理学の所見をもとに、カンシュ河口域を含むボンティウ地方の当時の海岸線についても新しい所見が示される。まず、中世初期の海進と海退の現象が起きて、オランダ・フリースランドのテルペン *terpen* と呼ばれる地形にも似た砂嘴、砂州が南北に形成される。この結果、それらと大陸部の間の一帯には海水が入りこんだままの状態が続き、浅瀬の内海が出現する。さらに、ルーシュは英仏海峡の干満時の潮流の変化を考慮に入れて、カンシュ河口部がフランドル沿岸部とならぶ大陸・イングランド間交易の良港地域を提供できたのだと結論する。というのも、当時の航行は平底の小型船を使って主に行われていたことは各地の船の発掘で知られており<sup>13)</sup>、それら吃水の浅い船の停泊には浅瀬の内海に面した浜こそ適当であったというわけである。しかも、地形を詳細に見ると、カンシュ川の右岸（北側）の水深は比較的あるのに対して、反対側の左岸＝南側はこの内海とつながるように浅瀬の沿岸であったという（*Ibid.*, pp. 463-467）。これにあわせてルーシュは、カントヴィックを一旦除外しても、他にも二カ所で造幣地が沿岸部のこちら側で確認されるという事実を指摘するが、このような集中は当時においては他ではロワール河地域でしか見られないと述べる（*Ibid.*, p. 467）。これこそは内海・カンシュ南岸部での流通活動の活況を最もよく表す事実というわけである（逆に、造幣活動は7～9世紀当時のカンシュ右岸流域からは確認されない）。

最後に、ルーシュはこの結論を導くに当たって、ほぼ同じ頃のイングランド南岸で発展したヴィック系集落ハンヴィック *Hamwic*（図2参照）が、砂浜の海岸をそのまま船舶停泊地として利用する商業地として復元されていたこと<sup>14)</sup>を、重要な傍証として論じる（*Ibid.*, pp. 471-472）。むろん、ヴィック系集落のすべての形態がハンヴィック型と断定することはできないが、少なくともカントヴィックの成長の根源を7世紀における英仏海峡間の活発な交易に求めるルーシュにとって、英仏両地点での「港湾」もしくは「交易地」の類似性は、同じ船がその間を行き来していたことは確かなだけに重要な論拠となった。

1977年の研究報告集では、もう一人、言語・地名学の観点からル＝ブルデレ氏による貢献がある（*Le Bourdellès* 1977）。彼によれば、「ヴィック」*wic* という語は、もともとラテン語の小集落を表す「ヴィクス」*vicus* がラテン語圏の北辺、あるいはその周辺地域で変形したもので、これが「商業集落」の意味に特化してラテン語圏に逆輸入された結果である

13) 北海から英仏海峡で使用された船の一例については、*R. L. S. Bruce-Mitford, and al., The Sutton Hoo Ship-Burial*, 3 vols in 4 books, British Museum, London, 1975-78-83などを見よ。また、現在エタープル市の「カントヴィック博物館」では、中世初期カントヴィック展示コーナーに、カントヴィックそのものよりも、当時の船の模型を多数展示している。いずれも正確に再現されたミニチュアである（2013年8月実地見学）。

14) 図2のハンヴィック復元図は、*R. Hodges, Primitive and Peasant Markets*, Oxford/New York, 1988, p. 48による。最新の発掘状況に関して、ヨーロッパ考古学 *Archeology in Europe* のHPから <http://www.archeurope.com/index.php?page=hamwic-or-saxon-southampton> も参照。なお、ハンヴィックも10世紀以降史料の文言からその姿が消え、その後サウサンプトン *Southampton* が後継都市として成長する。

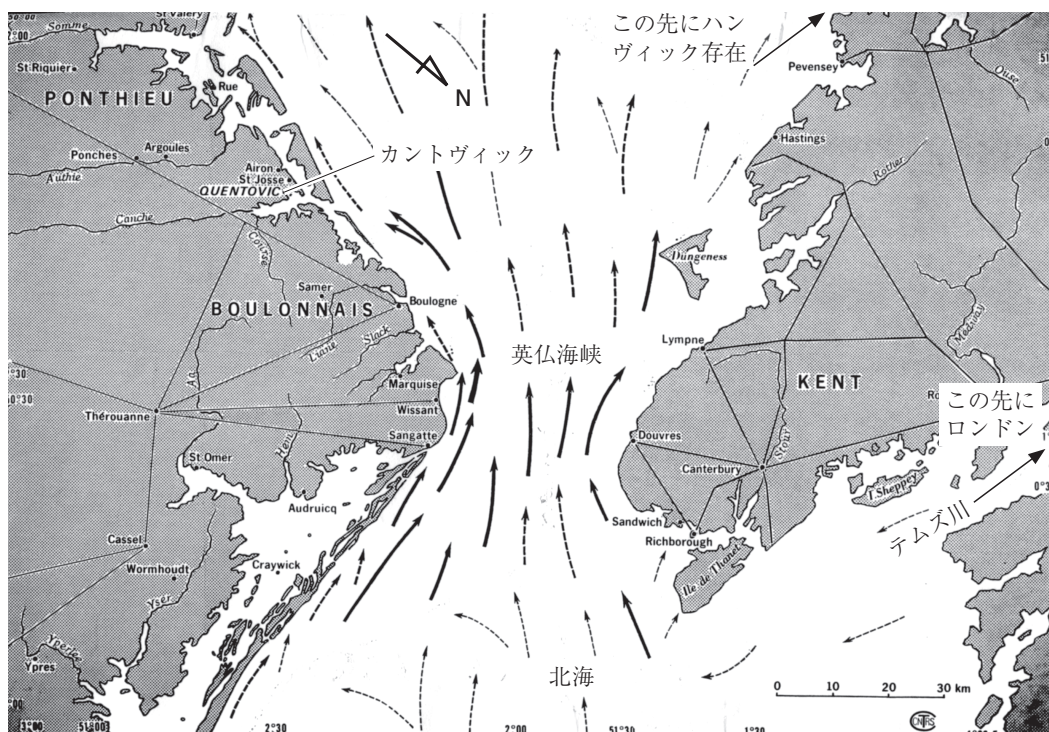


図1 メロヴィング時代の英仏海峡とカントヴィック Quentovic

← ← ← 潮の流れとその強弱  
 ——— ローマ時代の道

(Rouche 1977の図をもとに作成)

集落再現



海

図2 中世初期の〈wik〉の一つハンヴィックの再現図

(Hodges 1988, p. 48による)



とまとめられる。こうした地名は、英仏海峡の各地で出現していたが、メロヴィング朝のもとではカントヴィックは最初は単に「ヴィック」wic と呼ばれるのみであった。ただし、それは旧来のバグス（地方）の一つである「ポンティウにある…ヴィクス」と呼ばれていた<sup>15)</sup>。ところが、アングロ＝サクソン側の史料では7世紀後半から「カンタヴィック」Quentavic, Quantavic,あるいはその変形（ヴァリエント）が史料に登場してくる。そして、これがフランク側に伝わり、8世紀から9世紀にかけてフランク語における独自の接合母音〈-o-〉がアングロ＝サクソンの〈-a-〉に取って代わる音韻変化を生じながら、カロリング的な「カントヴィック」Quantovicの語形が生成された。これがさらに対イングランド関係の重要性から〈Quan-〉から〈Quen-〉に再変形されて、800年以降のカロリング朝の公式文書での表現は常にQuentovic (us) になるとする（付録資料1-2を通して参照）。

最後に、ブルデレはカントヴィックの名称が史料文言から消えていった後の地名情報についても、情報をとりまとめて提示している（Le Bourdellès 1977, pp. 483-484）。ブルデレはドントによる問題提起を想起した上で、中世初期ラテンの〈wicos〉〈wicus〉〈vicus〉が中世ロマンス語で複数形の〈wis〉〈vis〉となることを確認する。そのうえで、カロリング時代には上記に述べた〈Quentovic〉語形の形成が公式には生じつつも、もともと大陸で使われていた〈in Wicus〉や〈in portu Wicus〉などの表現も生き残り、それら「カンシュ川」に相当する語幹部を含まない地名表記は、9世紀を経るにつれて再び頻発してくるという（付録資料1-2後半の数点を参照）。そして938年のルイ4世の文書で、再建対象として言及されたカントヴィックの地は「ギッスムと人々が言うところの、海に面したかの城下にして港湾」と表現される（付録資料1-2-23）ように、ロマンス語音への音韻変化は10世紀にはすでに完了していたとされる。その後、この周辺には「ギッスム」のロマンス語形「ヴィス」の名と他の要素が組み合わさった地名が出現してくるという。まずは「山」を意味する〈mont〉と結合してできたモンテュイス Monthuis。この地名はサン＝ジョスとモントルイユの中間に位置して、かつてのカントヴィック近辺の小高い場所を指したのではないかと推察される。この地は比較的モントルイユに近いが、1286年のある文書のように、〈Montawis〉が〈Wis〉という表記とともに使用される事例も見られた<sup>16)</sup>という。また、ドントによっても重視されたヴィズマレ Visemarest（消えてしまったカントヴィック周辺の湿地帯を指して使われたと考えられる地名）は、1464年、1578年と中世後期以降に確認されてくる。この年代情報が出唆するのは、一帯の「沼地化」が10世紀や11世紀ではなく、それよりも後世に生じていた可能性である。

#### 中間的小括 一統編に向けて一

総じて、1977年のリール大学が中心となって企画された研究集会の諸報告は、ドントの

15) 7世紀の銭貨の銘にある〈vvico in Pontio〉など。付録資料1-1も参照。

16) G. de Lhomel, *Cartulaire de la ville de Montreuil-sur-Mer*, Abbeville, 1904, t. 3, p. 54.

示した研究指針の正しさを改めて確認し、細部においてはそれを発展的に継承したものである。偶然とはいえ、ちょうど同じ時期、かのドント自身も教科書的な記述を行う中で、カントヴィックに関してはリール大学のスタッフと連携をとって執筆を行ったことが知られる<sup>17)</sup>。また、ノルマンディのカン大学のミュッセは、同じ時期にカントヴィックを北フランス地方の「ゲルマン化する傾向」〈germanisme〉の結節点〈foyer〉と呼んでいるのも、かつのロットだけでなく、60年代以降のベルギー・北フランス学派の研究成果をもとにしたものといえる<sup>18)</sup>。

これら1970年代におけるカントヴィックをめぐる理解の大きな変化・進展は、現地における考古学の進展によるものではない。それらは未だ着手されたばかりで、本格的な調査はむしろ80～90年代以降のことである。それよりもむしろ、60～70年代以降ヨーロッパの他の地域で次々と始まっていた同じヴィック・エンポリア系初期定住や船の発掘調査がカントヴィックの理解を助けたといえる（ドレストット、ハンヴィックなど）<sup>19)</sup>。また、ベルギー・ヘント大学のフルヒュルストは、フランドル沿岸部における交易地の形成とカントヴィックの発展とを連動させて論じているように（Verhulst 1979, p. 190）、周辺地域における中世初期都市史の見直しが進んだことも影響している。さらに、1970年代以降は、考古学とならんで古銭学関連の基本資料が相次いで刊行され始めたことも情報の整理と共有という点で重要であった。こうした傾向はその後1980年代も続く（付録資料1-1を参照）<sup>20)</sup>。

巻末の文献一覧からも推察されるように、1980年代に入ると研究成果はさらに増していく。1990年代以降は考古学調査の面ではイギリスのシェフィールドのスタッフも関与を強めていく。また、フランス側でも地元におパル沿岸大学機関が設置されて、地元の研究スタッフをコーディネートするようになっていく。それでも1990年代から今日までカントヴィック研究をリードしてきたのは、リール大学の諸スタッフであり、また彼らが運営する『北フランス史誌』である。その詳細に関してはすべてを論じられないが、中世初期のフリースラント人の交易、ならびにその定住環境を研究したステファン・ルベックこそは、80年代以降カントヴィック問題に独自の貢献を成した代表格ではないだろうか。彼はカントヴィックがフランク王国のなかでも、西のネウストリア王国の発展との関連を述べた最初の研究者である。カ

17) J. Dhondt, et M. Ruche, *Le haut moyen âge (VIIIe-XIe siècles)*, Paris, 1968, pp. 146, 196; J. Dhondt, *Le Haut Moyen Age*, Coll. Clio, Paris, 1976.

18) L. Musset, *Les invasions : les vagues germaniques*, Paris, p. 173; Id., L. *Les invasions : le second assaut contre l'Europe chrétienne (VIIe-XIe siècles)*, Paris, 1971.

19) 我が国でもいち早くこの時期の交易港 emporium, wik をめぐる研究成果を詳細に検討し、紹介した論稿が二つある。堀内一徳「カロリング期フランク王国の経済的發展の一側面」『西洋史学』58号, 1963年, 42-54頁。山瀬善一「カロリング時代における〈EMPORIUM〉とその経済的意義—J. B. Akkermanの最近の業績によせて—」『国民経済雑誌』（神戸大学経済学部）118巻6号, 1968年, 40-59頁。

20) 我が国の中世初期史学界で、80年代以降にかけてのこの分野の研究動向を見通していたのが、森本芳樹『西欧中世経済形成過程の諸問題』木鐸社, 1978年である。特にその第2部「商品・貨幣流通と都市」の153-155, 211-213頁は、50～70年代の西欧の研究成果をベースにカントヴィックやドレストットの問題をまとめている。



ントヴィックの生成，あるいは他の近隣の港湾・交易地・商業地との関係を考える上で，現在も継承されている重要な論点となっているが，それらの点も含めて詳細は次号に譲る。続編(下)では，「カントヴィック史研究の到達点」と題し，サブテーマをいくつか設定したうえで，研究の進展具合をみていきたい。

## 付録資料1 中世初期カントヴィックに関する史料 ― 銭貨と文献に限定して ―

### 1 銭貨史料情報

カントヴィックに限らず，中世初期の交易地・商業地の立地や実態を知る上で，残存・伝来する銭貨（コイン）の意義はきわめて大きい。埋蔵貨，個別発見貨の区別を問わず，19世紀からそれらの収集と体系的な整理・刊行は実施されていて，まずは M. Prou, *Les monnaies mérovingiennes*, Paris, 1892がメロヴィング時代の銭貨標本を詳細な図版を伴って公にしている。カントヴィック，すなわち「ヴィック」製のそれは7～8世紀のもので，その銘には〈in VVic Pontio〉〈Wic in Pontio〉〈Wicco fit〉などがある。*Ibid.*, pp. 245-248. 同様に，カロリング時代についても，M. Prou, *Les monnaies carolingiennes*, Paris, 1896がある。〈christiana religio〉などカロリング朝期のカントヴィック貨の銘情報は *ibid.*, pp. 25-31を参照。

ただし，銭貨情報はその後も各地での発見により少しずつ更新されていく。それに関する主要な成果は F. Dumas-Dubourg, *Le trésor de Fécamp*, Paris, 1971（カントヴィック関係は pp. 108-123）；Ph. Grierson and M. A. S. Blackburn, *Medieval European Coinage*, vol. 1: *the Early Middle Ages (5th-10th Centuries)*, Cambridge, 1986の2点である。

他にも，カントヴィック等の交易地の銭だけでなく，西欧中世初期フランク王国の銭貨情報を整理分析した研究として，S. Coopland, *Carolingian Coinage and the Viking. Studies on Power and Trade in the 9th Century*, Aldershot, 2007がある。この論集に収録される論文は，いずれも1980年代後半から2000年代にかけての成果である。ここでこの文献に言及したのは，著者クーブランドが，伝来する銭貨の質と量に関して科学的な分析を進めているからであり，文献や銘の文言を超えた別種の情報を与えてくれるからである。

さらに，古銭学界からの情報として，エタープルで発見された銭貨の情報についてジヤール（Giard 1965），メロヴィング時代の〈VVic in Pontio〉貨をめぐるラフォリー（Lafaurie 1996）がそれぞれ個別論文を『古銭学会誌』に寄稿している。また，10世紀後半から11世紀初めにも，カントヴィック銘を持つ銭貨が製造されたが，その銭貨情報はクリノンの論文を参照（Crinon 2000）。

### 2 文献史料情報

さしあたり，10世紀初期より前のカントヴィックに関する文献史的な情報を，以下の23点に整理してみた。これ以外のブローニュ地方やピカルディ地方，あるいは類似するドレストットなど他の交易地に関する資料情報はここには載せてない。あくまでカントヴィックに直接関係する情報のみである。

なお，1983年にリール大学のステファン・ルベック氏は，自身の中世初期フリースラント商人の活動に関する学位論文を刊行するに際して，北海・英仏海峡域の諸活動に関する資料文言の集成を第2巻として同時に刊行した（Lebecq 1983, t. 2）。このなかでも，カントヴィックに関する文献史料の多くが言及されているので，以下では，それぞれの項目の最後で，ルベック氏の当該箇所との照合関係を指示しておいた。

以下は基本的に当該記録の成立年代順による。

- 1) ベーダの『イングランド（アングル）人の教会史』（8世紀第1三分期の作品）での記録。タルソスのテオドルスが、669年にカンタベリー大司教に就任するための、ローマからカンタベリーまでの旅に関する記述。  
Plummer (ed.), *Historia Ecclesiastica gentis Anglorum de Beda*, t. 4-1, p. 203: 〈... perduxit eum ad portum cui nomen est Quentavic, ubi fatigatus infirmitate aliquantes per moratus est, et cum convalescere coepisset, navigavit Brittaniam〉. (Lebecq 1983, t. 2, XLVI-4)
- 2) イングランドのエディウス・ステファヌス作の『聖ヴィリフレドゥス伝』（710年頃の作品）で述べられる7世紀後半の時期と判断される、同聖人のイングランドからローマへの旅に関する一節。  
B. Colgrave, *The Life of Bishop Wilfrid by Eddius Stephanus, Texts and translation*, Cambridge, 1927, p. 50: 〈putantes in austrum ad Quentawic navigantem, et via rectissima ad sedem Apostolicam pergentem, praemiserunt nuncios suos...〉 (Lebecq 1983, t. 2, X-2)
- 3) 8世紀後半のヴィリバルドゥス作の『[聖] ボニファティウス（ボニファス）伝』に見える、8世紀初め（717年のこととして）同聖人がカントヴィックを経てローマに向かったときの記述。遭難したが、幸運にもカンシュ川へと到着し陸地にたどり着き、そこはカントヴィックにある囲を持つ城砦地 cartum であったと述べる箇所。  
MGH, SS. *Rer. Germ.*, 57, *Vita Bonifatii auctore Willibaldo*, ed. Levison, 1905, p. 20: 〈Lundenwich... adiit... et pleno vento, prosperoque cursu hostia citius fluminis quod dicitur Cuent omni jam expertes periculi naufragio aspiciunt et ad aridam sospites terram perveniunt; sed castra metati sunt in Cuentawich ...〉 (Lebecq 1983, t. 2, XV-3)
- 4) 8世紀末に書かれた『フォントネル修道院長事蹟録』での、787年頃の事として記述される、修道院長となったゲヴォルドスが、かつてはカントヴィックにという名の関税徴収官であったことを述べる下り。彼は王国の各所を転々としたが、とりわけカントヴィックで活動したと述べられる。  
MGH, SS. *Rer. Germ.*, 28, *Gesta Abbatum Fontanellensium*, ed. Lowenfeld, 1886, p. 46: 〈Hic nempe Gevoldus super regni negotia procurator constituitur per multos annos, per diversos portus ac civitates exigens tributa atque vectigalia maxime in Quentawich〉. (Lebecq 1983, t. 2, XXXVII-5)
- 5) 794年頃のアルクインの書簡。自身が送ったマルティヌスという人物が病気でカントヴィック（ヴィック）に留まっている事を知らせたもの。カントヴィックがサン＝ジョス修道院近辺に位置する事が明示されている。  
MGH, *Epistolae Karolini aevi*, t. 4, ed. Duemmler, 1895, p. 66: 〈Martinus in Vicos apud Sanctum Judocum remansit infirmus〉 (Lebecq 1983, t. 2, LXVIII-3)
- 6) 779年のサン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院宛の国王特権文書。シャルルマーニュの時代にすでに重要な交易港であったことの証左として、国王に関税の徴収所であり、そこでの税の免除が特権として役立ち得たことを示す。  
MGH, DD. *Kalolini*, t. 1, Nr. 122, pp. 170-171: 〈decernimus... ut per ullos portos deque per civitates tam in Rodomo quam et in Wicus neque in Ambinis neque in Trejecto neque in Dorestado..., teloneus exigitur〉. (Lebecq 1983, t. 2, LXXXI-1)
- 7) 799年7月のアルクインのシャルルマーニュ宛の書簡。自身がカントヴィックに滞在している

事を伝えるもの。

*MGH, Epistolae Karolini aevi*, t. 4, ed. Duemmler, 1895, p. 177: <Revertente me de Wicus propter causas necessarias, quas ibidem habuimus disponere, occurrerunt mihi,...> (Lebecq 1983, t. 2, LXVIII-4(b))

- 8) 9世紀初めの『聖リカリウス（リキエ）奇蹟伝』で述べられる、サン＝リキエ修道院から15リウほどの距離に位置する港町であるという情報。

*MGH, SS.*, t. 25, p. 917: <vade... et perquire venerabilis Sancti Richarii monasterium, quod situm et est spatio quindecim leugarum a portu Quentowic>.

- 9) 828年のルイ敬虔帝によるいわゆる「商人への命令」*Praeceptum negotiatorum*。ここでは王国の関税徴収所としてカントヴィックを含めて3地点が言及されるのみである。779年のサン＝ジェルマン宛の国王文書で言及された地名の多くはここには登場しない。

*MGH, LL.*, t. 5, *Formulae*, ed. Zeumer, 1886, p. 315: <teloneum vero, excepto ad opus nostrum inter Quentovico et Dorestado vel ad Clusas, ubi ad opus nostrum decima exigitur, aliubi eis ne requiratur>. (Lebecq 1983, t. 2, LXXXVI-1)

- 10) 831年のルイ敬虔帝による『王国分割令 *divisio regni*』。カントヴィックがカンシュ川の北側の「地方 *pagus*」群とともに言及され、後のルードヴィヒ（ドイツ人王）の所有となることを定めた文書の関係箇所を抜粋。

Boretius-Krause, *MGH, Capitularia regum Francorum*, t. 2, p. 24. <Ad Aquitaniam... Inter Ligerim et Sequinam et ultra Sequinam... et Pontium usque in mare> <A bawairiam totam Torigiam... Austriban, Adertensis, Teroanensis, Bolensis, Quentovico, Camalecensis, Virdomatensis>

- 11) 841年のシャルル禿頭王の文書。サン＝ジョス修道院自体がカンシュ川沿いと表記されるほど近いところにあったことを示す情報。

G. Tessier, *Actes de Charles le Chauve*, t. 1, Paris, 1941, n° 3, p. 11: <cellam Sancti Judoci, sitam in pago Pontiu, super fluvium Quantiam>

- 12) 842年にノルマン人がカントヴィックやハンヴィックなどを襲撃した事を伝えるニタルドゥス（ニタール）の記述。

Nitard, *Histoire des fils de Louis le Pieux*, éd. Lauer, Paris, 1926, pp. 124-25: <Per tempus Nortmanni Contwig depredati sunt inibi mare trajecto Hamwig et Nordhunnwig similiter depopulate sunt>. (Lebecq 1983, t. 2, LVI-3)

- 13) 同じく842年の事件として、ノルマン人による攻撃とその被害のひどさを述べた、いわゆる『サン＝ベルタン年代記』の記述。9世紀を通して書き綴られた編纂物だが、当該箇所は862年までにトロワ司教ブルデンティウスによって記された。

*Annales Bertiniani*, éd. Grat, Paris, 1964, a° 842: <Ea tempestate Nordomannorum classis in emporio quod Quantovicus dicitur repentino sub lucem adventu depraedationibus, captivitate et nece sexus utriusque hominum adeo debachati sunt ut nihil in eo praeter aedificia pretio redempta relinquerent>. (Lebecq 1983, t. 2, LXII-13)

- 14) 844年のシャルル禿頭王の文書。父のルイ敬虔帝がサン＝リキエ修道院宛に発した文書内容を確認し、その財産を連挙したもの。その中に、カントヴィックの2地片が含まれる。

G. Tessier, *Actes de Charles le Chauve*, t. 1, Paris, 1941, n° 58, p. 166: <et in Quentvico seticis duobus>

- 15) 853/854年のシャルル禿頭王の文書。フォントネル修道院宛お財産確認文書におけるカントヴィックでの財産の言及。

G. Tessier, *Actes de Charles le Chauve*, t. 1, Paris, 1941, n° 160, p. 424: <...cum mansis in porta Wicus...>

- 16) 852年のサン＝ジョス修道院長でもあったルー・ド・フェリエールがフェリエール修道院に対して宛てた一書簡、852年のこと。エタープル <villa Stapulas> にてイングランドから来た鉛の積み降ろしを指示している。カントヴィックの地名はない。

Loup de Ferrières, *Correspondances*, éd. L. Levillain, Paris, 1927, t. 2, p. 74.

- 17) 857年とそれ以降の文書で、サン＝ベルタン修道院に属するマンス保有地がカントヴィックにあったとする情報。

M. Gysseling et A. C. F. Koch, *Diplomata belgica ante annum millesimum centesimum scripta*, Bruxelles, 1950, t. 1, pp. 53 et 67. (ちなみに1026年のサン＝ベルタン修道院の文書では、同修道院はエタープルと呼ばれる町にあるある土地を所有するとある (B. Guerard, *Cartulaire de l'abbaye de Saint-Bertin*, Paris, 1841, p. 175: <aliam terram, que jacet in villa Stapulas nominata>))。

- 18) 9世紀後半に記された『聖ヴァンドリーユ奇蹟伝』の一節。858年にモントルイユの南のプロールヴィルからブローニュへと向けて聖遺物の移送(奉遷)を行っていた際に、カントヴィック近辺のサン＝ピエール教会(同定されていない箇所)にさしかかったときに奇蹟が起きたと述べる下り。カントヴィックが <emporium> と呼ばれている一例。

*Miracula Sancti Wandrilli*, MGH, SS., t. 15-1, p. 408: <... ad ecclesiam sancti Petri quae vicina est emporio Quentovico...> (Lebecq 1983, t. 2, XXXII-2)

- 19) 同じく『聖ヴァンドリーユ奇蹟伝』の一節。シャルル禿頭王によってイングランドの諸王に対する使節団として任命されたのが、<emporium> であるカントヴィックの長官グリッポであった事を伝える一節。引用文の後、帰りの海路が荒れて苦勞するが、その行程で聖人の奇蹟を体験するという話が続く。

*Miracula Sancti Wandrilli*, MGH, SS., t. 15-1, pp. 408-409: <Illuster namque vir Grippo, prefectus videlicet emporio Quentovici, jussu precellentissimi regis Karoli quadam legatione functus est in insula Brittannica ad reges gentis Anglorum>. (Lebecq 1983, t. 2, XXXII-3)

- 20) 同じ『聖ヴァンドリーユ奇蹟伝』における他7回のカントヴィックへの言及。同作品では、カントヴィックを舞台に、あるいはその地を経由する人々をめぐって、他にも様々な奇蹟が起きたことが記述される。以下、奇蹟の内容は割愛し、先述の18)と19)以外の7箇所の情報を列挙する。

先の2例以外で <emporium> の呼称でカントヴィックが呼ばれる2箇所。<in paraedico emporio> (*Acta Sanctorum*, Juli, t.5, p. 285 A); <de emporio Quentovico> (*ibid.*, p. 288 A)。

<portus>—いわゆる港湾の意味だが、特にカロリング時代の北フランスから低地地方にかけては「港湾集落」あるいは「都市的集落」一般をも指す—の語でカントヴィックが呼ばれる4箇所。<in eodem portu> (*ibid.*, p. 284 D); <in Quentovico portu> (*ibid.*, p. 285 B); <... est vicināa portui Quentavico> (*ibid.*, p. 287 D); <Quentavico portu> (*ibid.*, p. 287 E)。

<oppidum>—一般的に都市的な集落、あるいは囲い地を想起させる語—の語で呼ばれる1箇所。これはポルトゥスと呼ばれた直後の文章で登場している。<in eodem oppido> (*ibid.*, p. 285 B)。

- 21) 864年のシャルル禿頭王によるピトレ勅令。王国内の公的な錢貨製造所の設置を数カ所に限定することを定めた文書。認められた製造地としてカントヴィックの地名は宮廷に次いで言及される。また、その次に名をあげられるルーアンは古来の慣習によりカントヴィックに付属するものと表記される。

Boretius-Krause, *MGH, Capitularia regum Francorum*, t. 2, p. 315. 〈ut in nullo loco alio in omni nostro moneta fiat nisi in palatio in Quentovico ac Rotomago, quae moneta ad Quantovicum ex antique consuetudine pertinent, et ...〉

- 22) 9世紀後半に偽文書として作成された、メロヴィング時代の国王ダゴベールがサン＝ドニ修道院に対して宛てた特権文書。フェングラーが629年のものと見て、7世紀前半からのカントヴィックの繁栄の証拠としたが、実際は850～900年の作。

*MGH, Diplomata regum Francorum*, ed. Perts, 1872, Nr. 23, p. 140: 〈Et sciatic nostril missi ex hoc mercato et omnes civitates in regno nostro, maxime ad Rothomo porto et Wicus Porto, qui veniunt de ultra mare pro vina melle vel garantia emendum; ...〉 (Lebecq 1983, t. 2, LXXIX-3)

- 23) 938年のルイ4世の文書。破壊されていた「ギッスム（ヴィッスム）」の町の再建を命じたものの。

G. de Lhomel, *Cartulaire de la ville de Montreuil-sur-Mer*, Abbeville, 1904, t. 3, p. 4: 〈castrum quoddam portumque supra mare, quem dicunt Guisum〉

## 付録資料2 文献目録：カントヴィック、及びカンシュ川流域、北フランス地域の中世初期定住・流通史に関する主要欧語文献（刊行年順）

### ◆ 19世紀～20世紀前半

Comite de Boulogne (1841-43), 《Rapport sur les fouilles faites en 1841, à Etaples, lu à la séance publique du 20 décembre 1841》, *Mémoire de la Société académique des Antiquaires de Morinie*, 6, pp. 191-215.

Robert, F. -J. (1849-50), 《Mémoire sur Quentovic》, *Mémoire de la Société académique des Antiquaires de Morinie*, 8, pp. 510-534.

Cousin, L. (1854), 《Emplacement de Quentovic》, *Mémoire de la Société académique des Antiquaires de Morinie*, 9, pp. 253-338.

Souquet, G. (1863), *Histoire chronologique de Quentovic et d'Étaples*, Amiens.

Cousin, L. (1862-64), 《Nouveaux éclaircissements sur l'emplacement de Quentovic》, *Mémoires de la société Dunkerquoise*, 9, pp. 430-509.

Dupont, Ed. (1864), 《Compte-rendu de Souquet, G. 1863, *Histoire chronologique de Quentovic et d'Étaples*》, *Bibliothèque de l'école des chartes*, 25, pp. 471-473.

Fengler, O. (1907), 《Quentowic, seine maritime Bedeutung unter Merowingern und Karolingern》, *Hansische Geschichtsblätter*, 12, pp. 91-107.

Lot, F. (1915), 《Les migrations saxonnes en Gaule et en Grande-Bretagne du IIIe au IVe siècle》, *Revue historique*, 119, pp. 1-40.

Vercauteren, F. (1934), *Etude sur les civitates de la Belgique Seconde. Contribution à l'histoire urbaine du nord de la France de la fin du IIIe à la fin du XIe siècle*, Bruxelles.

Héliot, P. (1937), 《La question de Quentovic d'après les travaux récents》, *Revue du Nord*, 23,



pp. 260-265.

- Grierson, Ph. (1941), 《The Relations between England and Flanders before the Norman Conquest》, *Transaction of the Royal Historical Society*, 5<sup>th</sup> series 23, pp. 71-112.
- Lot, F. (1945), 《Un prétendu repaire de pirates normands au IXe siècle. Ingueobes et les origines de Montreuil-sur-Mer et d'Étaples》, *Comptes-rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 89, pp. 423-432.
- Héliot, P. et Leduque, A. (1948), 《Les fortifications de Montreuil-sur-Mer au Moyen Age》, *Revue du Nord*, 30, pp. 184-196.
- Lestocquoy, J. (1948), 《Les origines de Montreuil-sur-mer》, *Revue du Nord*, 30, pp. 184-196.
- Sabbe, E. (1950), 《Les relations économiques entre l'Angleterre et le continent du haut moyen âge》, *Le Moyen Age*, 56, pp. 171-193.
- Vercauteren, F. (1959), 《La vie urbaine entre Meuse et Loire du VIe au IXe siècle》, *Settimane di studio del centro italiano di studi sull' alto medioevo*, 6, *La città nell' alto medioevo*, 10-16 aprile 1958, Spoleto, pp. 453-479.

#### ◆ 1960-1970年代

- Dhondt, J. (1962), 《Les problem de Quentovic》, *Studi in onore di Amintore Fanfani*, t. 1, Antichità et alto medioevo, Milano, pp. 181-248.
- Giard, J. -B. (1965), 《Le trésor d'Étaples》, *Revue numismatique*, 6e série, 7, pp. 206-224.
- Fossier, R. (1968), *Terres et hommes de Picardie*, 2 vols., Paris/Louvain.
- Rouche, M. (1977), 《Les saxons et les origines de Quentovic》, *Revue du Nord*, 59, pp. 457-478.
- Le Bourdellès, H. (1977), 《Les problèmes linguistiques de Quentovic》, *Revue du Nord*, 59, pp. 479-488.
- Cousin, J. -L. et Leman, P. (1977), 《Contribution à la recherche de Quentovic. Découvertes de tessons du Haut Moyen Age dans la Canche》, *Revue du Nord*, 59, pp. 489-500.
- Verhulst, A. (1979), 《An Aspect of the Continuity between Antiquity and Middle Ages ; the Origin of the Flemish Cities between the North Sea and Schelde》, *Journal of Medieval History*, 3, pp. 175-205.

#### ◆ 1980年代

- Le Bourdellès, H. (1981), 《Les problèmes linguistiques de Montreuil-sur-Mer : les origines de la ville à travers ses noms successifs》, *Revue du Nord*, 63, pp. 947-960.
- Leman, P. (1981), 《Contribution à la localisation de Quentovic ou la relance d'un vieux débat》, *Revue du Nord*, 63, pp. 935-945.
- Lebecq, S. (1983), *Marchands et navigateurs frisons du Haut Moyen Age*, 2 vols., Lille.
- Johanek, P. (1985), 《Der "Außenhandel" des Frankenreiches der Merowingerzeit nach Norden und Osten im Spiegel der Schriftquellen》, K. Düwel, H. Jankuhn, H. Siems, und D. Timpe (Hrsg.), *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor- und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel- und Nordeuropa*, Teil III, *Der Handel des frühen Mittelalters*, S. 214-254.
- David, M. W. (1985), 《Trade between England and Scandinavia and the Continent》, *ibid.*, pp. 255-269.
- Johanek, P. (1985), 《Der fränkische Handel der Karolingerzeit im Spiegel der Schriftquellen》, K. Düwel, H. Jankuhn, H. Siems, und D. Timpe (Hrsg.), *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor- und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel- und Nordeuropa*, Teil IV, *Der Handel der Karolinger- und Wikingerzeit*, S. 7-68.
- Coutts, C and Worthington, M. (1986), 《The Early Medieval Pottery from Quentovic: an Interim

Note), *Medieval Ceramics*, 10, pp. 23-27.

Leman, P. (1986), «À la recherche de Quentovic», *Archeological*, 218, pp. 36-42.

Desmulliez, J. et Milis, L. (1988), *Histoire des provinces françaises du Nord, t. 1, De la préhistoire à l'an mil*, Arras.

Lebecq, S. (1989), «La Neustrie et la mer», H. Atsma (éd.), *La Neustrie. Le pays au nord de la Loire de 650 à 850*, t. 1, Sigmaringen, pp. 405-440; reprod. in Lebecq 2011, t. 2, pp. 73-107.

Routier, J. C. (1989), «Les remparts de Montreuil-sur-Mer», *Revue du Nord*, 71, pp. 205-214.

#### ◆ 1990年代

Hill, D., Barrett, D., Maude, K., Warburton, J. and Worthington, M. (1990), «Quentovic Defined», *Antiquity*, 64, pp. 51-58.

Collini, R. (1991), «Quentovic: an Early Medieval Emporium in Northern France (a Site Delimitation and Palaeo-Environmental Study)», *The Manchester Archaeological Bulletin*, 33, pp. 20-28.

Lebecq, S. (1991), «Pour une histoire parallèle de Quentovic et Dorestad», J. -M. Duvoisiel et A. Dierkens (éds.), *Villes et campagnes au moyen âge. Mélanges George Despy*, Liège, pp. 415-428; (後のLebecq 2011には再録されず)。

Carver, M. O. H. (ed.) (1992), *The Age of Sutton Hoo: The Seventh Century in North-Western Europe*, Woodbridge.

・Wood, I., «Frankish Hegemony in England», *ibid.*, pp. 234-241.

Hill, D., Worthington M., Warburton, J. and Barrett, D. (1992), «The Definition of the Early Medieval Site of Quentovic», *Antiquity*, 66, pp. 965-969.

Hill, D. (1992), «The siting of the early medieval port of "Quentovic"», *Rotterdam Papers*, 7, *Handel, handelspaatsen en handelswaar vanaf de vroege middeleeuwen in de lage landen, Rotterdam van 2 t/m 3 november 1990*, Rotterdam, pp. 17-24.

Kelly, S. (1992), «Trading privileges from eighth-century England», *Early Medieval Europe*, 1, pp. 3-28.

Wood, I. (1993), *The Merovingian Kingdoms, 450-751*, Abington/New York.

Lebecq, S. (1993), «Quentovic: un état de la question», *Studien zur Sachsenforschung*, 8, pp. 73-82; reprod. in Lebecq 2011, t. 2, pp. 149-164.

Lebecq, S. (1994), «Entre Manche et Mer du Nord, entre Grande-Bretagne et continent: les relations à travers le détroit dans les premiers siècles médiévaux», S. Curveiller (dir.), *Les champs relationnels dans l'Europe du Nord et du Nord-Ouest des origines à la fin du Premier Empire*, Calais, pp. 29-43; reprod. Lebecq 2011, t. 2, pp. 203-220.

Fossier, R. (1996), «Le problème des marchés locaux en Picardie aux XIe et XIIe siècles», Desplat, Ch. (dir.), *Foires et marchés dans les campagnes de l'Europe médiévale et moderne. Actes des XIVes journées internationales d'histoire de l'Abbaye de Flaran, Septembre, Auch*, pp. 15-25.

Hodges, R. (1996), «Dream Cities: Emporia and the End of the Dark Ages», N. Christie & S. T. Roseby (eds.), *Towns in Transition: Urban Evolution in Late Antiquity and the Early Middle Ages*, Aldershot, pp. 289-305.

Lafaurie, J. (1996), «VVIC in Pontio. Les monnaies mérovingiennes de Wicus», *Revue numismatique*, 151, pp. 181-239.

Russo, D. G. (1998), *Town Origins and Development in Early England : C. 400-950 A.D.*, London (pp. 169-194: chap. 6, Continental Emporia and their English Connections, C. 600-950 A.D.).

## ◆ 2000年代

- Crinon, P. (2000), «Le monnayage de Quentovic au nom de Robert II (associé 987- seul roi 996-1031)», *Bulletin du la Société Française de Numismatique*, 55, pp. 183-185.
- Hodges, R. (2000), *Towns and Trade in the Age of Charlemagne*, London.
- Laganier, R., Piquet, P., Salvador, P. -J. et Scarwell, H. -J. (2000), «Inondation, territoire et aménagement : révolution de la prise en compte du risque inondation dans la vallée de la Canche (Pas-de-Calais, France). / Flooding, territory and planning : changes in the appraisal of flood risks in the Canche valley (Pas-de-Calais, France)», *Géocarefour*, 75, pp. 375-382.
- McCormick, M. (2001), *Origins of the European Economy. Communications and Commere, AD 300-900*, Cambridge.
- Alibert D. et Firmas, A. de (2002), *Les sociétés en Europe du milieu du VIe à la fin du IXe siècle*, Paris.
- Bruand, O. (2002), *Voyageurs et marchandises aux temps carolingiens. Les réseaux de communication entre Loire et Meuse aux VIIIe et IXe siècles*, Bruxelles.
- Coupland, S. (2002), «Trading places: Quentovic and Dorestad reassessed», *Early Medieval Europe*, 11-3, Oxford, pp. 209-232; reprod. in Id. 2007, *Carolingian Coinage and the Viking. Studies on Power and Trade in the 9th Century*, Aldershot.
- Verhulst, A. (2002), *The Carolingian Economy*, Cambridge.
- Devroey, J. -P. (2003), *Economie rurale et société dans l'Europe franque (VIe-IX siècles)*. t. 1., Paris.
- Bauduin, P. (dir.) (2005), *Les foundations scandinaves en Occident et les débuts du duché de Normandie*, Caen.
- Le Maho, J. (2005), «The Fate of the Ports of the Lower Seine Valley at the End of the Ninth Century», Pestell, T. and Ulmschneider, K. (eds.) 2003, *Markets and Early Medieval Europe. Trading and "Productive" Sites, 650-850*, Macclesfield (Cheshire), pp. 234-248.
- Middleton, N. (2005), «Early medieval port customs, tolls and controls on foreign trade», *Early Medieval Europe*, 13, pp. 313-358.
- Bauduin, P. (2009), *Le monde franc et les Vikings, VIIIe-Xe siècles*, Paris.

## ◆ 2010年代

- Lebecq, S., Béthouart, B. et Verslype, L. (dir.) (2010), *Quentovic : environnement, archéologie, histoire. Actes du colloque international de Montreuil-sur-Mer, Etaples et Le Touquet et de la journée d'études de Lille sur les origines de Montreuil-sur-Mer, 11-13 mai 2006 et 1er décembre 2006*, Université Charles-de-Gaulle, Villeneuve-d'Ascq.
- Béthouart, B., «Préface. Quentovic entre hier et demain», *ibid.*, pp. 9-12.
  - Meurisse, M. et Van Vliet-Lanoe, B., «Evolution morphologique quaternaire et holocène du Pas de Calais. Implications archéologiques», *ibid.*, pp. 19-38.
  - De Meulemeester, J. Et Lehouck, A., «L'archéologie des zones littorales à la période carolingienne», *ibid.*, pp. 39-56.
  - Philippe, M., «L'estuaire de la Canche, de la préhistoire au port médiéval. Aux sources de la localisation géographique de Quentovic», *ibid.*, pp. 57-76.
  - Delmaire, R., «La situation du détroit avant Quentovic», *ibid.*, pp. 77-84.
  - Duceppe-Lamarre, F., «Ecologie du bassin de la Canche au haut Moyen Age. Le milieu naturel», *ibid.*, pp. 85-102.
  - Buche, F., «Le peuplement du littoral du Pas-de-Calais au haut Moyen Age d'après la toponymie», *ibid.*, pp. 103-124.
  - Seillier, Cl., «Rupture et continuité dans le Boulonnais et le Ponthieu entre le Bas-Empire et le

haut Moyen Age», *ibid.*, pp. 125-146.

- ・ Soulat, J., «La présence saxonne et anglo-saxonne sur le littoral de la Manche», *ibid.*, pp. 147-164.
- ・ Wood, I., «Quentovic et le Sud-Est britannique (VIe-IXe siècle)», *ibid.*, pp. 165-176.
- ・ Le Jan, R., «Les élites neustriennes et Quentovic au VIIe siècle», *ibid.*, pp. 177-194.
- ・ Mériaux, Ch., «Quentovic dans son environnement politique et religieux: cités et diocèses au nord de la Somme au VIIe siècle», *ibid.*, p. 195-214.
- ・ Leman, P., «La desserte routière de Quentovic-Visemarest», *ibid.*, pp. 215-220.
- ・ Gautier, A., «Traverser la Manche au tournant du VIIe siècle. Réseaux politiques et systèmes de communication au temps de l'émergence de Quentovic», *ibid.*, pp. 221-236.
- ・ Le Bourdellès, H., «La toponymie de Quentovic», *ibid.*, pp. 237-240.
- ・ Lebecq, S., «L'administration portuaire de Quentovic et de Dorestad (VIIIe-IXe siècles)», *ibid.*, pp. 241-252 ; reprod. Lebecq (2011), t. 2, pp. 165-174.
- ・ Hill, D. et Worthington, M., «La contribution des fouilles britanniques à la connaissance de Quentovic», *ibid.*, pp. 253-264.
- ・ Routier, J. -Cl. et Barbet, P., «Bilan des connaissances archéologiques en basse vallée de Canche autour de Quentovic», *ibid.*, pp. 265-306.
- ・ Hodges, R., «Cinquante ans après Dunning: réflexions sur les emporia, leur origine et leur développement», *ibid.*, pp. 307-316.
- ・ Es, W. A. van, Verwers, W. et Johannes, H., «L'archéologie de Dorestad», *ibid.*, pp. 317-328.
- ・ Blackmore, L., «Lundenwic. Essor et déclin d'un établissement commercial anglo-saxon des VIIe-IXe siècles», *ibid.*, pp. 329-366.
- ・ Hall, R. A., «Eoforwic (York) du VIIe au milieu du IXe siècle: questions de définition», *ibid.*, pp. 367-380.
- ・ Müller-Wille, M., «Les ports contemporains de Quentovic entre Mer du Nord et Baltique», *ibid.*, pp. 381-408.
- ・ Rossignol, S., «Les ports de la Baltique (VIIIe-IXe siècles)», *ibid.*, pp. 409-430.
- ・ Révillion, St. et al., «Quentovic. Realités et perspectives archéologiques», *ibid.*, pp. 509-522.
- ・ Lebecq, S. et Verslype, L., «Epilogue. Quentovic aujourd'hui», *ibid.*, pp. 523-528.

(以下は Montreuil 史の再考に関する論稿)

- ・ Barbier, J., «Du vicus de la Canche au *castrum* de Montreuil, un chaînon manquant: le fiscus d'Attin?», *ibid.*, pp. 431-457.
- ・ Garry, S. et Helvétius, A. -M., «De Saint-Josse à Montreuil: l'encadrement ecclésiastique du vicus de Quentovic», *ibid.*, pp. 459-474.
- ・ Bauduin, P., «Montreuil et la construction de la frontière du duché de Normandie», *ibid.*, pp. 475-492.
- ・ Nieuws, J. -F., «Montreuil et l'expansion du comté de Flandre au Xe siècle», *ibid.*, pp. 493-508.

Klaesoe, I. S. (ed.) (2010), *Viking Trade and Settlement in Continental Western Europe*, Copenhagen.

Heuclin, J. (2011), «Des routes et des hommes en Gaule durant le haut Moyen Age», *Revue du Nord*, 93, pp. 735-748.

Lebecq, S. (2011), *Hommes, mers et terres du Nord au début du Moyen Age*, 2 vols., Villeneuve-d'Ascq.

Lebecq, S. and Gautier, A. (2011), «Routeways between England and the Continent in the Tenth Century», D. Rollason, C. Leyser et H. Williams (eds.), *England and the Continent in the Tenth Century. Studies in Honour of Wilhelm Levison (1876-1947)*, Turnhout, pp. 17-34.

- Martin, C. et Gautier, A. (dir) (2011), *Échanges, communications et réseaux dans le haut Moyen Âge. Études et textes offerts à Stéphane Lebecq*, Turnhout.
- Costambeys, M., Innes, M. and MacLean, S. (2011), *The Carolingian World*, Cambridge.
- Chameroy, J. et Guihard, P. -M. (dir) (2012), *Circulations monétaires et réseaux d'échanges en Normandie et dans le Nord-Ouest européen (Antiquité-Moyen Âge)*, Caen.
- Le Maho, J., «Avant et après les Normands. Les lieux d'échanges dans l'espace fluvino-maritime normand au haut moyen âge (VIIe-Xe siècle)», *ibid.*, pp. 185-206.
- Gautier, A. et Rossignol, S. (éds.) (2012), *De la mer du Nord à la mer Baltique. Identités, contacts et communications au Moyen Âge*, Villeneuve d'Ascq.
- Bauduin, P. et Musin, A.E. (dir.) (2014), *Vers l'Orient et vers l'Occident. Regards croisés sur les dynamiques et les transferts culturels des Vikings à la Rous ancienne*, Caen.
- Lebecq, S., «Les Occidents dans l'espace scandinave et baltique aux VIIIe-IXe siècles», *ibid.*, pp. 29-37.